

マザー・キャサリン

ゾラ・ニール・ハーストン

産業運河下流のセント・クロードを直進し、フラッド通りで南を向き、フロリダ遊歩道近くまで進む。右を見ると、高い板の柵で囲い込まれた大きな囲いがある。高い場所から半ダースの旗が立派にはためく。ギリシヤの十字架がチャペルの上にある。大きなアメリカの国旗が大きなテントからはためく。

フラッド通りと旗のはためく囲いの間には湿地があり、歩かなければならない。人が近づくと、その場所の人が会いに出てくる。こんなものを作ったのは普通の人ではない。

門には穴から突き出ている錆びた針金がある。それは呼び鈴である。しかし門にある看板にこう書かれている。「マザー・シールは聖なる霊につき、妨害厳禁。」

訪問者はマザー・キャサリン（マザー・シール）がいるテントへ直接行かない。

訪問者は祈るためにチャペルへと案内される。霊がマザー・キャサリンにその人
を呼ぶように告げるまで。原始的な壮麗さ、旗、刺繍、マザー・キャサリンが購入
したり創作した絵画、磨かれた真ちゅうや灯油ランプで輝いている祭壇の場所。こ
の建物の中には三五六のランプがあるが、すべてが中央の祭壇の上にあるわけでは
ない。

壁と天井は赤、白、青で装飾されていた。聖心の部屋の天井と床は、三色で縞が
付けられており、壁には鏡板が張られている。鏡板には蛇の絵が描かれている。こ
れはヴードゥーの影響によるものではなく、アフリカの背景によるものである。ア
フリカ人はハ虫類の美しさを描くのを好むのだと私は思う。

張り紙にはこう書いてある…もう一度話せるように話さない。

ギリシヤの十字架の下のこのチャペルの中やまわりの様子のすべてを詳細に書く
と、一冊の本になるだろう。しかし、白い衣服を着た聖人に御前へと呼び出される
のだ。マザー・キャサリンは大きなテントの中で謁見を行う。高くなっている台に

はマザー・キャサリンのベッド、ピアノ、十人編成のオーケストラ用の楽器、大きなコーヒー沸かし、薪ストーブ、暖房器具、椅子、ロッカー、テーブルがある。背もたれのない長椅子がテントいっぱいに並んでいる。

この黒人のキャサリンがテントへの入口の内側にある演台の端で平凡な椅子に座っている姿は、ロシアのキャサリンが玉座の上にいるよりも印象的である。マザー・キャサリンの表情や振る舞いは強い印象を与える。彼女に安っぽさやわざとらしさはない。マザー・キャサリンは西洋人がしないような方法で住まいの装飾を施す。しかし、それは効果のためではない。感情のためである。彼女はコロネットのように頭に青いバンドを着け、そして白いローブと幅の広い肩から落ちてくる華やかな赤いケープを身にまとしてそこに座っており、手には儀式の杖のように塩の箱を持っており、どこかの遊牧部族の女性支配者といった雰囲気である。こう書くにつれつまが合わないと分かっているが、そうは見えなかった。砂利の床の上にひざまづいたことは私にはまったく自然に思えた。そして彼女が私に右手を伸ばし、清めの

塩を手取るように合図した時、私はそうする気分になり、急いで彼女に従った。

彼女は私の頭に手を置いた。

「娘よ、どうしてここへ来たのですか。」

「マザー、私は知識を求めて来ました。」

「ありがとうございます。皆さん、彼女の言葉が聞こえましたか？彼女は知識を求めてここへ来ました。さあ、塩を食して、神と私に心を寄せなさい。見つけに来たものが分るでしょう。私はあなたを感じとります。あなたがチャペルの中で座っている間、私はあなたを感じました。彼女にボールを持ってきなさい。」

ボールが届き、熱心な祈祷とともに私の頭の上に置かれた。そのときは私がマザーのことを書きたいということ彼女に伝えなかった。何度か訪問を重ねて、随分時間が経ってから伝えた。私がそのことを話すと彼女はとても親切で、彼女や飼いや葉桶の壁の後ろのすべての写真を撮らせてくれた。

私はマザー・キャサリンと二週間過ごし、彼女のテントで開かれる夜と日曜の礼

拜に続けて参列した。これらの集会では平凡なことは何もなかった。彼女はいつも変わらずに集まった人々に食料を与える。おいしく十分な量の食べ物も与える。日曜日の礼拝では大きなコーヒー沸かしが音を立てており、ある時になると彼女はパンを清め、砕き、少量の塩を振りかけた。これを彼女はすべての人に与えた。大人にはコーヒーも与えた。マザー・キャサリン自らがカップに注ぎ、砂糖を加えて味をみて、会員が演壇の前を通る時にカップを手渡した。ある時点で彼女は、皆に色が塗られている樽を通り過ぎて列をなし、一杯の水を取るように命じた。これらの事は不可知論者には何の内なる意味もないが、通例のキリスト教の礼拝における退屈な単調さを駆逐した。また、彼女の信奉者の中に生まれた信条を見ることも大したことだった。

彼女の説教の間じゅう、二羽のオウムが鳥かごの中から鳴いていた。シャウトが大きくなると、白いボタンインコは鋭い声で鳴いた。礼拝中、三羽のカナリアは楽しそうに歌い、さえずっていた。四匹の雑種犬がうろついた。ロバや子連れの母ヤ

ギ、何羽もの雌鳥、羊―すべてが場違いな様子もなく、礼拝の中に入ったり出たりしていた。メソジストあるいはバプテストの教会は―あるいはどの宗派でも―、これらの動物に困惑しただろう。二匹の犬が暖房器具の近くの場所を取るために争った。三歳以下の三人の子どもが演壇の上の後ろの方で話し手や観衆の注意をそらすことなく遊んでいた。青や赤のローブを着た聖人が、話し手のすぐ後ろで動かずに立ち、聴衆は動いていった。

大半の宗教指導者とは異なり、マザー・キャサリンは個人を押しつぶすことはない。彼女は独創性を奨励する。困い地には陽気な空気があるのだ。すべての動物たちは優しく遇されている。

マンガアの困い地の中では金銭が請われることはない。もし渡したければ渡しても構わない。マザーは腰帯からさげたポーチを持っている。いつでも祭壇に近づいて、寄付を入れてもよい。しかし、何も持っていないなくても歓迎されるだろう。マンガアに住んでいる人は皆、マザー・キャサリンの出費でそこにいるのだ。彼女は音

樂を奨励し、少年少女が時間に間に合うように学校へ出かけるのを見る。

その場所にはカトリックの趣があるが、カトリックではない。彼女は自身を知るすべての宗教から好みの特徴を取り入れたのである。

マザー・シールは語る…「こんばんは、ベールと旗よ！」

「あなたがたに伝えるように神が私におっしゃる。(変わらない始まりである。)
神はその手の真ん中に世界を握っておられると。」

「この地球の下に地獄はありません。神はご自身の息を燃やすために地獄を作ろうとはなさらないのです。」

「あの青い地球の向こうに天国はありません。この茶色の地球とその上の青の間に中間の世界がある。美しき靈はそうおっしゃる。」

「死を迎える時、呼吸はどこへ行くのだろう。木の中、草の中、動物の中へ行く。肉体はこの世の地球を豊かにするためにそこへ戻る。美しき靈はそうおっしゃる。」

「脳は私たちから何かを作り出すとする。皆、何かよいものになれる。」

「女性が指導することは正しい。子宮は神が最初から作ったもので、子宮から生まれたのが時であり、宇宙を満たすすべてである。美しき靈はそうおっしゃる。」

「賢明なことをするのが得意でない人がいるが、よこしまなことは得意である。」

「神は世界で最も大きなホワイトハウスで生まれたのかもしれない。しかしそうではないのは、神は偉大ではないホワイトハウスへたどり着けない人種が生まれる事を知っていたためで、神は皆が到着できるように生まれた。」

「神は、人々が救われるのを喜ばれるのと同じように、人々が呪われるのを喜ばれる。美しき靈はそうおっしゃる。」

「神がどこから来られるかを知るのは人間の仕事ではない。」

「使者や預言者が言うことを伝えてはなりません。木に行つて、純粹な樹液を得て、彼らが正しいかどうかを見出しなさい。」

「魂を見た人はいない——人は靈が行なうことは見えるが、靈を見ることはできない。」

彼女が祝福を与える準備ができると、邪悪な思想が彼女に届き、彼女は突然椅子に座り、手で顔を覆って、そのようにした理由を説明する。それが終わると彼女は起き上がり、「さあもう一度教えましょう。」と言う。

ここで食べ物提供されるが、霊からの啓示が来るまでは配られなかった。

聖プロンプト・サカーは合図でたらいとタオルを持ってきた。彼女は手と顔を洗った。

マザー・キャサリンがキリストと対等の地位にいたいと思っていることは明らかだ。釘打ちや建築は金曜日には実施されない。大工はのこぎりを引いたり測定をしたりしても構わないが、釘打ちや接合はしてはならない。

彼女は両手を置くことで、暗示することで、多量のひまし油とエプソム塩で癒す。彼女はテントの中で遠く離れた場所で癒す。彼女は信奉者のためにたらいに聖水を持っていたが、テントの外へ移動することなく、信奉者たちの家の給水栓の中の水までをも清めるほどに、神性を感じるのである。

マンガーの中では足を組んではならない。それは聖霊に対する冒瀆である。

マザー・キャサリンのキリストの神格についての概念は、人が皆、育ての父であるように、ヨセフがキリストの育ての父であり、子どもは皆、神の子どもで、父は皆その手段にすぎないというものである。

彼女の信奉者は皆、彼女の記章を身につけている。女性は無漂白のモスリンのベールを付けている。男性は腕章を付けている。皆、三日月形のもの M. C. S (Mother Catherine's Saints <マザー・キャサリンの聖徒>) の文字を身につける。どこでも身につけなければならない。

二月の下旬と三月の月上旬に大雨になり、多くの人が洪水を恐れていた。マザー・シールは自身の信奉者たちに信仰を自分に寄せることを強く勧めた。彼らは彼女を信じ、彼女のもとへ来て、彼女が彼らのために料理した、清められた魚を食べさせれば、洪水は起こらないのである。「神よ、」と彼女は言う、「魚の手にオールをつけてください。この魚を食べなさい。そうすれば、魚が洪水を恐れないように洪水

を恐れる必要はありません。

すべてが共感呪術。鶏肉、牛肉、子羊は、喜びを与える血の動物である。これらは食料としてふんだんに使われ、しばしば癒しとして使用される。新しく屠殺された鶏は縦に裂いて開けられ、痛む足に縛り付けられた。

彼女の信奉者は皆、白人も有色人種も、彼女の子どもである。彼女は他の人種と同じだけ人種を抱えている。

「私にはあらゆる種類の子どもがいるが、私は彼らの母です。その中の何人かは聖人もいれば、罪人や囚人もいる。体内の赤ん坊を殺した人もいる。また夜に通りを歩く人もいる―しかし彼らは皆、私の子どもです。神にはあらゆる種類の人がいます、どうして私が皆を愛せないでしょう。美しき霊はそうおっしゃる。」

「いま、あなた方皆は信仰の中で帰宅しなさい。私は三日後にあなたのもとに現れるでしょう。疑わないで。信仰の中で帰って祈りなさい。」

三は宗教体験に捧げられた礼拝における期間である。

ある女性が啓示を体験した。彼女は壁に光がきらめくのを見た。それはこう書いてあった、「マザー・シールのところへ行きなさい。」彼女は腎臓に膿を持った状態でやって来たが、治った。

十四歳の少女は、中央に一輪の大きなユリのあるユリ畑に変わった、ほうれん草畑の啓示体験があった。その畑は彼女の教会で、大きなユリはマザー・キャサリンだった。

宗教体験の告白のほとんどは、マザーの力に癒されたという謝意に関することか、マザーに頼んだ願いがどのように実現したかということに関連する。

マザー・キャサリンの宗教は母権性である。神とマザーだけが重要である。この信条において出産は最も重要な要素である。彼女の囲い地はマンガールと呼ばれており、婚姻内外を問わず出生に捧げられている。

何度も何度も彼女は出生を褒めたたえる。罪深い出生は存在しない。そして、墮胎によって出産を回避する女性は「罪深き不身持ちな女」と呼ばれる。

マザー・キャサリンは誰かに改宗されたのではない。キリストやムハンマド、ブツダのように、召命がただ現れた。彼女と神の間には誰もいないのだ。

召命の後、彼女は性的な関係を断ち、断食と祈祷によつて、体を神聖にした。

彼女は当時結婚していた。彼女の夫は彼女の信仰に改宗する前に二週間祈祷した。その上に、彼女は裏庭のタブで彼を洗礼した。肉体の欲求のために彼が信奉者の一人と駆け落ちするまで、神聖な男女として六か月間二人は一緒に暮らした。

彼女はジャクソン通りで初めての集会を開催したが、彼女に群衆が群がったので、当局は彼女を押しやった。そのため、裕福な信奉者たちは、現在マンガーの場所である産業運河下流に一区画の土地を購入した。

神は彼女を十二フィートを越える囲いのあるマンガーへ送った——門を通らずに。彼女は魂が言葉を与えたとき以外は外出に時間をあてがってはならなかった。チャペルの屋根から降下した後、彼女は決してその場所を離れることはなかったが、一度、故意ではないことが起こった。彼女は囲い地の中で車の運転を習っていた。コ

ントロールを失って、車が止まるまでに囲いの柵に穴が開いてしまった。彼女は信奉者呼び「迎えに来て！」と言った（彼女はマンガラの外の神聖ではない土地に足を踏み入れてはならないのだ。）信奉者が来て敬虔に彼女を持ち上げ、囲い地の中へ運んだ。彼女が立ち入った庭の場所は神聖になったが、それは彼女の足が地面に触れるように声話してこう言ったからだ、「信者が神聖な水を飲むように、ここにゲッセマネの貯水池を掘りなさい。」この文の執筆時点で、井戸は建設中である。